

中村汀女

句集
紅白梅

白凰社刊

句集『紅白梅』普及版

昭和四十五年三月十日発行

著者／◎中村汀女

東京都世田谷区代田五―三五―一七

発行者／高橋謙

発行所／株式会社白凰社

東京都千代田区神田神保町一―二〇

振替口座番号・東京九二二四一

定価／六〇〇円

印刷／三協美術印刷株式会社

製本／和田製本工業株式会社

石川南美子氏

中村汀女

句集
紅白梅

白凰社刊

目次

昭和二十六年 四二句

昭和二十七年 四七句

昭和二十八年 五七句

昭和二十九年 五〇句

昭和三十年 七〇句

昭和三十一年 四七句

中国行 二〇七句

昭和三十二年 六一句

昭和三十三年 六五句

昭和三十四年 八一句

昭和三十五年 八五句

昭和三十六年 九六句

128

116

106

97

89

51

45

36

30

22

16

11

	昭和三十七年	一〇五句
	昭和三十八年	八〇句
	昭和三十九年	一〇五句
	昭和四十年	五八句
	欧米行	五九句
	昭和四十一年	九七句
	昭和四十二年	七四句
	昭和四十三年	一一四句
	昭和四十四年	七五句
	(合計一、六七五句)	
私の句法		
あとがき		

250 241 230 216 208 194 186 179 166 155 141

紅
白
梅

昭和二十六年

春風に人に向ひて歩を早め
町も裏ネオンも裏や雪解風
春水の水音ひとつ峡を行く
永き日の遠ちにも部屋や歌時計
たんぽぽの茎の短く日にまとも
木影はや彼岸詣での肩袂
ロータリー降る春雪の夜をこめて
厨房の火の燃えつづけ帰る雁

雁 帰 る 川 風 荒 く 人 遠 く
また何ぞ言はれ居る身を浴みする
水 無 月 の 照 る 日 曇 る 日 来 る 土 鳩
金 魚 屋 に わ が さ み だ れ の 傘 雫
遠 雷 の 今 た し か な る 楡 大 樹
つ つ じ 散 る 濁 れ る 池 に 櫂 を 入 れ
雨 音 の ひ つ き り な し に 枇 杷 甘 し
蝸 牛 わ れ は 夕 の 火 作 れ ば
髭 振 り て 蟻 も 涼 し き 風 に あ ふ
夕 焼 の 今 退 く や 竈 の 火
紅 提 灯 破 る る ば か り 花 火 爆 ぜ

川風のここも及びて花火急
大西日後尾車掌に当るまま
早打の花火のほかの町の音
大花火こだましあへば心満ち
朝発ちの菰投げ捨て月見草
ねぎらはれ居り秋蟬の声の中
かくれ住むとて秋蟬の町の上
こほろぎの久しく待ちて音をつづく
大空に微塵かがやき松手入
汐上げて霧また早き家並かな
細畦を田嶋も歩む我も歩む

すれちがふ間も暮れて来し貝割菜
聞耳の狐の貌の安んじぬ
月の罨声を立てずに狐落ち
北風の奪へる声をつぎにけり
雪小止みすぐ来て居りし四十雀
低き日のかかりて温くき雪の原
雪搔くと雪を左右すばかりなり
大櫓の思ひつきては雪払ふ
今年藁青き蕤や熊手市
働くや八ツ手の花に町の霧
風の吹き過ぐ方に吹かれ立ち

残
る
も
の
木
賊
の
青
や
寒
雀